

昭和の灯

2022.4.6

あるお店の入口のシャッターが閉まっていた。ずっと閉まったままである。貼紙があった。そこには、次のように書かれてあった。

大変お世話になりました。

感謝して 幕を引きます 昭和の灯 母の愛せし ○○酒店

私も八十三才となりました。

長い間の御愛顧に心より御礼申し上げます。 店主

本当は、もっと書きたいこと、伝えたいことがあるのだろうと思う。その思いを一首したためることで伝えようとしているところが店主のなせる業であり、お人柄である。短い故に伝わることもある。店主の心意気ともいうべきか。

このお店には行ったことがある。以前お世話になった方のご実家である。店主であるお母様とも話をしたことがある。母親から引き継いだお店をいよいよ閉じることも知っていた。実は、前任校への通勤経路上に、このお店があった。毎朝目にしていたお店なのである。しばらくの間は、そこがお世話になった方のご実家とはわからなかった。

縁が縁を呼び、ご実家に何うようになった。店主とも何度か話をした。一度は、電話で長電話をしたこともある。あんなに長電話をしたのは、いつ以来だっただろうかと思うほどだった。前任校に別れを告げる際にも伺った。

通勤経路が大きく変わり、○○酒店の前を通ることもなくなった。先日、たまたま向こうの方に行く機会があった。そこで、○○酒店の前を通ることにした。そうしたら、貼紙があった。スマホで画像に収めた。これで、いつでも見ることができる。

縁とは、人と人との結び付きだが、そこには心が必要となる。心と心の結び付きが縁となる。少し見方を変えてみると、今日から野田中学校で生活する中学生とも縁を感じる。そうであるならば、心が必要となる。

今年度も心をベースとした学校経営をしていきたい。教育は人の心が決めるのである。思いやりを柱に、心が通い合う野田中学校にしていきたい。それが、○○酒店の店主から教わったことなのかもしれない。